

関東支部「秋の見学会」に参加して

恒例の関東支部「秋の見学会」が11月13日(金)、14日(土)の2日間にわたって行われた。今年度は福島方面で、主な見学先はエルナー福島(株)、ソニー本宮(株)、日東紡績(株)福島第2工場、(株)ホクシン及び二本松市効外の(有)大内酒造であった。

38名の参加者は1名の遅刻者、欠席者もなく、定刻の午前8時に東京駅丸の内明治屋前に集合、京成バスで一路福島へ向かった。窓外の風景は霞立つ小春日和、東北自動車道をひた走るバスの心地好い揺れで、周囲の人々の話声もともすれば夢の中であった。目的地に近づくにつれ美しい紅葉も目につくようになり、新幹線や航空機を利用する旅行とは異なるいわゆる「旅」気分も味わうことができた。

最初の見学先、エルナー福島(株)本社工場に着いたのは、出発して3時間後の11時10分頃であった。この会社は昭和36年電解コンデンサーを製造するため白河電子工業(株)として設立されたのが始まりで、現在福島県内に2工場を持ち、アルミ電解コンデンサーとタンタルコンデンサーを製造している。平成4年5月本社に新工場を建設し生産を始めたが、全体の生産ラインはまだ完成していない。見学はひたすらロボットの動きを追うことに終始した。現在稼働率80%、ロボットによる生産品の不良率0.2~0.3%である。バスの中で昼食を摂り、午後1時15分ソニー本宮(株)着。女子従業員が多いだろうと想像していたが、確かにその通りであった。厚生施設も女子中心、売店で売られているものは菓子スナック類、化粧品などが圧倒的に多い。設立は昭和48年、資本金4億円、全額ソニー(株)の出資で、従業員1355人中女子は60%を占める。カラーテレビの主要部品であるトリニトロン電子銃、偏向ヨークなどを生産している。自動化率は70%で、ソニーグループ中最も低い。「昔紡績、今電子部品」。何時の時代でも先端産業は女性によって支えられている。不況下にもかかわらず工場の

稼働率100%は、将来に不安があるとはいえ見事である。午後2時40分別れを告げ、この日の最終見学先日東紡績(株)福島第2工場に向かった。午後3時10分着。ここでは、同じ福島市内にある福島工場で紡糸されたグラスファイバーを用いたクロスを製造している。グラスファイバーは不燃耐熱繊維材料、電気絶縁材料、補強繊維材料として各方面で多量に使用されているが、それ自身新素材としての性格を持つため、技術的に企業機密に属する部分が多い。エアージェット式の何百台とも知れぬ織機が一斉に稼働している織物工程には圧倒される思いであった。一見の価値がある。終日のバス旅行で疲労を覚えた身に、飯坂温泉での宿泊はありがたかった。体重増加を気にしながら懇親会に参加したのは、筆者だけであつたらうか。

2日目。記念撮影の後、定刻の午前8時出発。水晶発振機、水晶フィルター、水晶振動子を製造している福島市内の(株)ホクシンを訪ねた。組立てはほとんど手作業である。黙々と単純作業を繰り返している外国人労働者の姿が印象的であった。建物の見事な福島県立美術館を見学、再び記念撮影をして、信夫山公園内の「田楽懐石御山角屋」で昼食。公園内の紅葉が美しく、見物する時間がないのが残念であった。見学会はいよいよ最終コースとなり、二本松市内の「万古焼」窯元に寄った後、半数ずつのグループに分かれた。一方は菊人形展の見学、他方は酒造所の見学である。筆者は後者を選んだ。創業以来350年、16代続いた酒造所「大内家」のたゞずまいは、周囲の風景とともに一幅の絵であった。酒造には100%地下水が使用されている。発酵槽の蓋を開けたときの芳醇な香り、柄杓で飲んだ原酒の味は、心のこもった説明とともに生涯忘れられぬ。「銘酒身近にありて心なごむ」ひとときであった。

帰路東京へ向けて走り続けるバスの車窓から見た夕日が美しかった。東京駅八重洲口着午後6時50分。有意義な2日間であった。御協力頂いた会社関係の方々、本見学会を企画され、実施された幹事の方々に心よりお礼申し上げます。

(上智大学理工学部 岸岡 昭)



日東紡績(株)福島第2工場にて